

筵打

〔延喜式掃部三十八〕試延曆寺年分度者座料略○中 席四枚六年一充

〔延喜式勘解由四十四〕凡略 ○中 席六枚次官已上 並三年一度申官請換

〔嫁入記〕一むしろしく事はのぶると申なりしきやうは女房のをばまつしき候て、そのちおとこ方ののをのぶる也、はこにはとのがたのを上に入る也、とりいだしてまづそばにうちをきて、女房のをしくなりた、む時はおとこがたよりた、むなり、

〔延喜式内藏十五〕雜作手卅三人略○中

織席手一人

〔夫木和歌抄筵三十二〕六帖題

道のべにそのゐかりほす筵うち。おのれかつくしくかとぞみる

〔七十一番歌合上〕八番 右 筵うち

打絶ていとめまばらのあら筵いのねらるべき月の影かは

〔日本書紀齊明二十六〕五年、是歲略○中 高麗使人持熊皮一枚、稱其價曰、綿六十斤、市司咲而避去、高麗畫師

麻呂、設同姓賓於私家、日倩官熊皮七十枚、而爲賓席、客羞恠而退、

〔今昔物語十九〕六宮姫君夫出家語第五

今昔六ノ宮ト云フ所ニ住ケル舊キ宮原ノ子ニ、兵部ノ大輔ト云フ人有ケリ、略○中 連子ノ内ニ人

ノ氣ハヒ有リ、和ラ寄テ颯ケバ、筵ノ極テ穢ケルヲ曳廻シテ、人二人居タリ、一人ハ年老タル尼也、

一人ハ若キ女ノ極テ瘦セ枯テ色青ミ影ノ様ナル、賤シキ様ナル筵ノ破ヲ敷テ、其レニ臥タリ、中

ノ衣ノ様ナル布衣ヲ著テ、破タル筵ヲ腰ニ曳懸テ手枕シテ臥シタリ、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年六月九日、酉刻雷落子御所御車宿東母屋上、柱破風等破損訖、後藤判官下

部一人悶絶、則纏筵出自北土門畢、及戌刻死云云、

筵雜載

信實朝臣